

清里の森第1遺跡
範囲確認調査報告書

1987.3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、山梨県林務部による別荘分譲地「清里の森」造成に先立ち、1986年6月に実施した山梨県北巨摩郡高根町清里の「清里の森第1遺跡範囲確認調査」の結果をまとめたものであります。

当遺跡は、当埋蔵文化財センターが1983年度から85年度までの3次にわたって行なった「八ヶ岳東南麓遺跡分布調査」で確認されたものであり、「清里の森」内からは、縄文時代の遺物や遺構などが4カ所の地点から出土しております。

今回の調査は、上記の調査で確認された遺物・遺構出土地点のうち、「清里の森第1遺跡」について、さらに細かく試掘坑を設定し、遺跡の広がりを確認して、開発計画と遺跡保存との調整を行う資料を得るためのものであります。試掘坑は、ひとつの尾根を覆うように設定し、その数は合計132カ所の多きに及びました。

調査の結果、縄文時代中期の住居址1軒、早期の陥し穴2基を確認いたしました。残念ながら、集落址のような遺構の広がりはありませんでしたが、標高が1320mと本県の遺跡としては最高所に立地する遺跡であり、高冷地における生活の有り様を知る好材料となるものと信じます。

なお当遺跡は、県林務部との協議の結果、そのまま保存されることとなりました。林務部の方々のご英断に改めて深甚の敬意と謝意とを表します。また、お世話になった関係機関各位、並びに直接調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本書は、北巨摩郡高根町清里の別荘分譲地「清里の森」造成地内の清里の森第1遺跡の範囲確認調査報告書である。
2. 本調査は、山梨県林務部の委託を受け、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査および整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで行なった。担当者は、保坂康夫。
4. 本書は、Ⅷの一部を高野玄明、他を保坂が執筆した。編集は、保坂が行なった。遺物写真の撮影は、塚原明生（日本写真家協会会員）が行なった。
5. 本書にかかる出土品および写真・図面は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
6. 整理作業参加者は、下記のとおりである。（敬称略、順序不同）
名取洋子、弦間千鶴、石川操、遠藤映子、松野和美、高野玄明、宇野文子、山口清子、渡辺哲章
7. 調査から報告書作成までの間に、次の方々から御協力、御助言を賜った。衷心より御礼申し上げる次第である。（敬称略、順序不同）
利根川欽一、谷口彰男、河西学（山梨文化財研究所）、白倉民雄、雨宮正樹（高根町教育委員会）

目　　次

I	調査に至る経緯	1
II	調査組織	2
III	遺跡の位置と環境	2
IV	調査の方法と経過	5
V	層序	6
VI	遺構と遺物	
1.	1号住居址	7
2.	1号陥し穴	15
3.	2号陥し穴	16
VII	遺跡の範囲	19

挿 図 目 次

第1図 清里の森第1遺跡調査風景	1	第13図 1号住居址エレベーション図	10
第2図 遺跡位置図	2	第14図 1号住居址北西側トレンチ	11
第3図 清里の森第1遺跡調査地域位 置図	3	第15図 1号住居址炉址および遺物出 土状態	11
第4図 清里の森第1遺跡試掘坑配置 図	4	第16図 1号住居址土器出土状態	11
第5図 清里の森第1遺跡土層断面図	6	第17図 1号住居址出土土器(1)	13
第6図 繖を含むローム層と黒色土層	6	第18図 1号住居址出土土器(2)	13
第7図 1号住居址調査風景	7	第19図 1号住居址出土遺物	14
第8図 1号住居址北部	7	第20図 1号陥し穴	16
第9図 1号住居址西部	7	第21図 1号陥し穴土層断面	16
第10図 清里の森第1遺跡1号住居址 平面図	8	第22図 1号陥し穴実測図	17
第11図 1号住居址土層断面	9	第23図 2号陥し穴	18
第12図 1号住居址東部	9	第24図 2号陥し穴実測図	18

I 調査に至る経緯

山梨県北西部にある八ヶ岳山麓は、豊かな穀倉地帯であると同時にいくつかの観光地を擁している。高根町の清里もその一つで、年間百数十万人もの観光客が往来する。こうした地域には広大な県有林があるが、その県有資産を効率的に開発し県財政に資すると同時に、地域の発展にも貢献すべく開発計画が立案された。県林務部による別荘分譲地「清里の森」もその一つである。工事は、昭和59年度から4期にわたって行なわれることになった。別荘の建つ各区画については造成は行なわれないが、区画をつなぐ道路、駐車場、テニスコート、公園、管理棟などの建設が工事の主な内容である。

「清里の森」は200haにものぼる広大な面積を有する。この地域は、一時牧場として利用されていたらしいが、現在は全域が林地となっている。したがって、埋蔵文化財の存否がまったく不明な地域であった。しかし、清里地域では、縄文時代の土器や石器をはじめとする遺物が広域的に表採されており、いくつかの遺跡の存在が知られていた。また、先土器時代遺跡の遺跡集中地として名高い長野県野辺山原とも隣接し、地形や標高等が近似することから、同時代の遺跡の存在も予想された。

そこで、県教育委員会は、遺跡の存否を確認すべく、本地域と同時に開発が進められる県企業局による総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」建設予定地も含め、遺跡分布調査を行なった。調査は、文化財保存事業として文化庁の国庫補助を受け、昭和58年度から昭和60年度まで、3次にわたって行なった。両地域は林地であるため、試掘坑により遺構・遺物を確認する方法をとった。「清里の森」地域では、3次にわたった調査で316ヶ所の試掘坑を設定し、4ヶ所の試掘坑から遺物・遺構を確認した。2ヶ所が陥穴、2ヶ所が縄文時代遺物である。また、テニスコート造成中に縄文時代の磨製石斧と五輪塔水輪が発見された（山梨県教育委員会 1986）。

これらの遺物・遺構出土地点のうち、公園の造成工事にかかる可能性のある地点1ヶ所につ

いて、遺跡の範囲を確認し、工事と埋蔵文化財の保護との調整をはかるべく、県林務部と県教育委員会とで協議した。分布調査では、20~50m間隔で試掘坑が設定されていたが、今回の調査では、さらに細かく、5m間隔で試掘坑を設定し、遺跡の広がりを把握することとなった。なお、本遺跡は、清里の森第1遺跡と呼称することとした。本来、小字名を遺跡名に用いるべきであるが、本地域には小字名がないからである。



第1図 清里の森第1遺跡調査風景（北から）

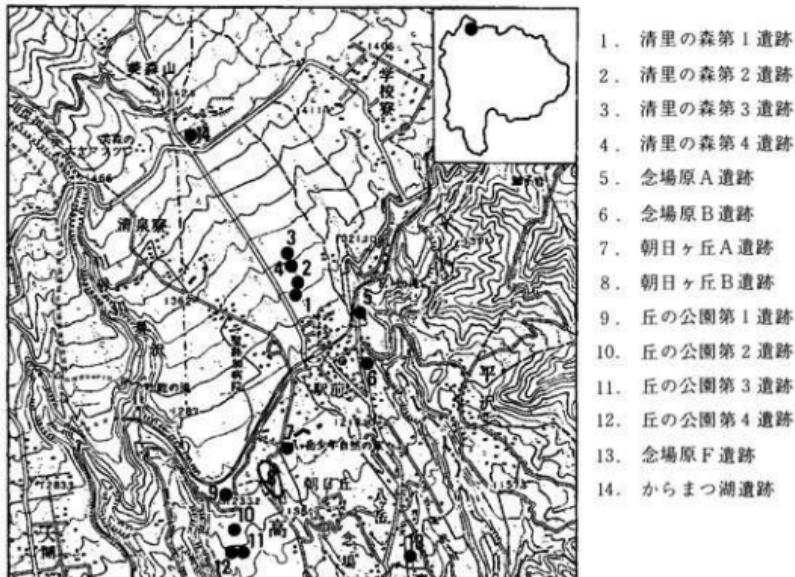
II 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 保坂康夫
作業員 小清水たか子、藤居治郎、栗林貴美江、小沢みよ子、小清水盛、利根川慶一、
藤谷昌子、宮井徹行、岡部正夫、中口勝功、重川恵美子、堀川ふじ、
津金多嘉造、齊藤登美夫、抱江勝重、矢島啓子、津金トメコ、税所晋次郎、
堀川覚雄、津金はる江、東本千枝子、利根川かの子、藤居晃、堀川志き、
長田光枝、利根川かず子、小林きやう、武井時政、堀川てるよ、高野俊彦
協力機関 高根町教育委員会

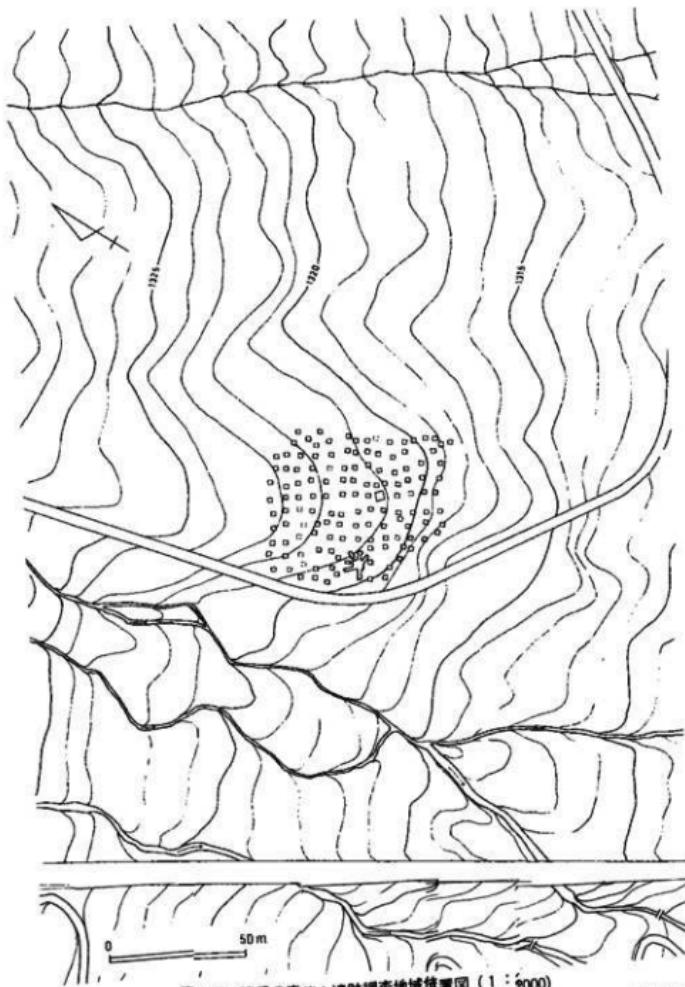
III 遺跡の位置と環境

本調査を行なった清里地域は、通称念場原といわれる台地上に位置している。念場原は、東を大門川、西を川俣川の深い谷によって切られる、東西2.5km、南北5kmほどの台地状の土地で、八ヶ岳の広大な裾野の一部を構成する。

念場原の基底部には、八ヶ岳の容岩を被覆して、葦崎岩屑流がみられる。20~30万年前の八

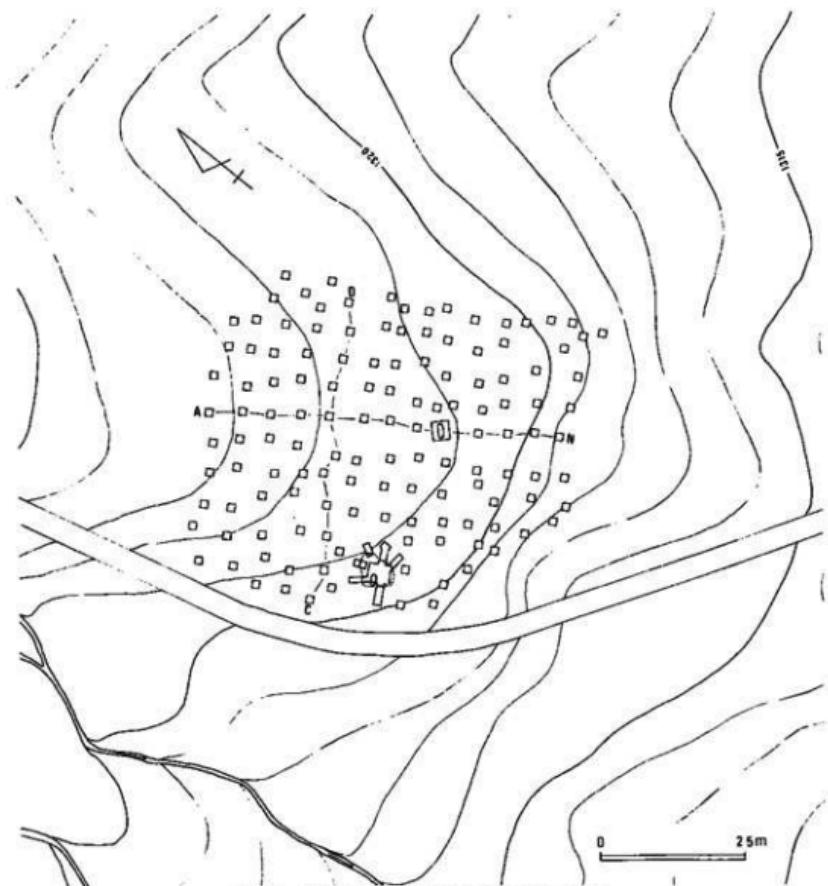


第2図 遺跡位置図 (1:50000)



第3図 満里の森第1遺跡調査地域地図(1:2000)

ヶ岳大爆発で山体が崩壊したものである。その上位には、自然の營力による山体崩壊で堆積した弘法板磧層がみられる。この两者で100m近い厚さとなる。最上部には、厚さ数mのローム層が乗る。その中には、御岳山起源のPm₁-I(約8万年前)やPm₁-IV(約5万年前)が狭在する。ローム層の上位には、厚さ数十cmの黒色土層が覆う。また、川俣川の崖線に近い地域では、黒色土層の上位に、非常に軟質で暗褐色を呈する風成堆積土層が覆う。この土層は、断続的に高さ2~3mの土壘状の高まりとなって連続する場合もある(山梨県教育委員会 1986)。



第4図 清里の森第1遺跡試掘坑配置図 (1:1000)

念場原の地形は、基本的には、南北に細長く、ローム層よりなる高平坦地と、礫を多く含むローム層や礫層が露出し、河川が流下する谷底平地である低地とからなる。念場原南端へ行くほど高平坦地が広くみられるが、北部地域、特に国鉄小海線より北側の地域では、低地が広がり、ローム層の平坦地は島状にみられるのみである。

念場原は、標高1000mを越える高冷地であるが、昭和61年度に高根町教育委員会が行なった遺跡分布調査でかなりの数の遺跡が確認された（高根町教育委員会 1987）。第2図中に示した遺跡では、先土器時代が9～11の遺跡である。5や14の遺跡で剥片が1点ずつ表採されたが、これらは先土器時代である可能性もある。縄文時代の遺物は、5や14以外のすべての遺跡で見い出されている。特に8の遺跡では早～後期の土器群が多数表採されている。

弥生時代以降の遺物は、8で弥生・古墳（五領期）・中～近世の土器が、13で近世の土器が見い出されている。この地域にはないが、念場原の南部には、平安時代の遺跡が3遺跡あり、また、中世の遺跡が多い。

このように、念場原には、先土器時代から断続的にではあるが遺跡の形成がなされている。文献では、平安時代の三御牧の一つ、拍前牧の比定地となっている。また、中世に開墾され、念場干軒と呼ばれるほどの繁栄を誇ったといわれる。清里の森第3遺跡の五輪塔や、念場原南部に多い中世遺跡が念場干軒の名残りかもしれない。

清里の森第1遺跡周辺の地形をみてみよう（第3図）。本遺跡周辺には、小起伏がかなりみられるが、比高2～3m程の低いものばかりである。小河川が多数流下しており、広域的に大小の疊が露出している。遺跡の立地するのは、平面形が滴状をした島状の高地である。高地上には疊の露出もなく、ローム層がよく発達している。遺跡は滴状の高地の末端部付近の西側斜面、小河川に臨んで立地している。標高は、1320mである。

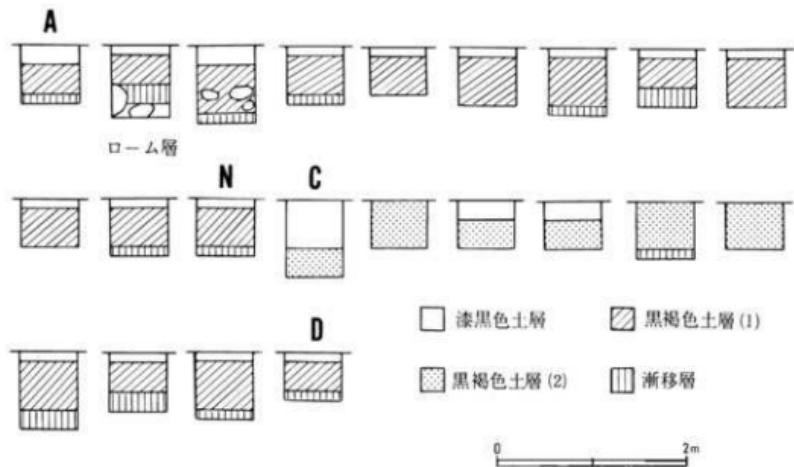
IV 調査の方法と経過

調査は、昭和60年度に行なった八ヶ岳東南麓遺跡分布調査によって、縄文時代中期の土器群が出土した試掘坑を中心にして、その周辺への遺跡の広がりを確認することを目的に行なった。遺物出土地点の西側にはすでに幅2mの道路が建設されていた。この道路を境に東側が高地の斜面、西側が小河川へと連続する低平地とに分かれる。低平地は、大小の疊が露出しており、遺跡の残存の可能性がないものと思われた。

一方、遺物出土地点の東側は、皿を伏したような高地になっており、遺跡の広がりが予想されるような地形である。そこで、試掘坑は、道路から東側の地域で、高地をほぼ覆うように設定することとした。調査地域の東半部は、すでに樹木の伐採、持ち出しが終了しており、試掘坑の設定も容易であったが、西半部の斜面は林地のままになっており、設定に難渋した。

試掘坑は、132ヶ所設定した。縄文時代の土器が出土した試掘坑では、住居址などの遺構の有否の確認のため、広域的にトレントを設定した。その結果、縄文時代中期の住居址1軒と、早期と思われる陥し穴2基を確認した（第4図）。試掘坑は1m四方、深さ1m前後である。

住居址を確認した地点においては、住居址のプラン確認のためのトレントを何本か設定した。昭和60年度の遺跡分布調査時に遺物を確認した試掘坑を中心に4m四方のトレントを設定した。このトレントでは、全面的に平坦な床面が確認され、壁がみられなかったので、周間に細長いトレントを設定し壁面の位置を確認した。細長いトレントは、南西、西、北西、北、北東、東の6本を設定した。南西側が3.5m、西側が3.3m、北西側が2m、北側が2m、北東側が3.4m、東側が2.8mの長さで、幅はいずれも1m前後である。各トレントでは、壁や床面の他柱穴も確認した。さらに中央トレントから、縄文時代早期と思われる陥し穴も確認した。住居址を1号住居址、陥し穴の2号陥し穴とした。1号住居址に切られた2号陥し穴の他に、その地点から約30m東の地点で陥し穴を確認した。この陥し穴を1号陥し穴とした。試掘坑を拡張し、全体を調査した。調査は、昭和61年6月2日から6月14日にかけて行なった。



第5図 清里の森第1遺跡土層断面図

V 層序

本地域の土層は基本的には黒色土層とローム層とからなる。黒色土層は、上層の非常に軟質な漆黒色土層と、硬質の黒褐色土層に分かれる。黒褐色土層の下部にローム層との漸移層がみられる。本地域では、この漸移層まで掘り下げて遺構確認を行なった。なお、本地域の西側では、黒色土層下部の黒褐色土層よりもさらに明るく軟質な黒褐色土層があり、縄文中期の住居址を覆っている。前者を黒褐色土層(1)、後者を黒褐色土層(2)とする。前者の分布地域では、ローム層中に多量の礫が含まれるらしい。後者の分布地域では、ローム層に礫を含まず、ソフトローム層、ハードローム層とともにみられる。後者の分布地域では、漆黒色土層が非常に薄いか確認できない場合が多い。こうした状況からして、黒褐色土層(2)は、漆黒色土層堆積時に、高地西斜面が広域的に擾乱を受けたことを示す土層かもしれない。

なお、住居址床面を構成するハードローム層は、ちょうど床面レベルに、純層ではないものの、肉眼で確認できるほど多量の火山ガラスを含んでいた。山梨文化財研究所の河西学氏によると、A T (始良Tn火山灰 - 22000年前) の可能性が強いとのことである。



第6図 矾を含むローム層と黒色土層

VI 遺構と遺物

1. 1号住居址

住居址プラン（第10図） 中央トレンチから6本の細長いトレンチを拡張して壁を確認した。東側トレンチでは、中央トレンチよりで、ほぼ南北方向のやや湾曲する壁面を確認した。幅約30cm、高さ約20cmで、非常にゆるやかな傾斜で立ち上がる（第13図、S-Tエレベーション図）。北東側トレンチでは、中央トレンチよりで、北西-南東方向のやや湾曲する壁面がみられた。この壁面は2段になっており、上段が幅約20cm、高さ約15cmでやや急な立ち上がりで、下段は幅約50cm、高さ約20cmの暖かな傾斜である（第11図、I-Jセクション図）。北側トレンチは、立木のため全体を確認できなかつたが、中央トレンチよりで北西-南東方向のやや湾曲する壁面を確認した。確認できた範囲では幅約35cm、高さ約30cmのかなり急傾斜な壁である。また、北側で幅約30cm、高さ約20cmの段を確認したが、性格は不明である（第13図、O-Pエレベーション図）。北西側トレンチでは、ほぼ中央で北東-南西方向のほぼ直線的な壁面を確認した。幅約40cm、高さ約30cmで非常に緩かである（第11図、C-Dセクション図）。西側トレンチでは、南北方向に、幅約50cm、高さ約20cmのやや湾曲する緩傾斜の壁が確認できた（第11図、E-Fセクション図）。南西側トレンチでは壁面が確認できなかつたが、ほぼ水平な床面と、自然傾斜との変換部分が確



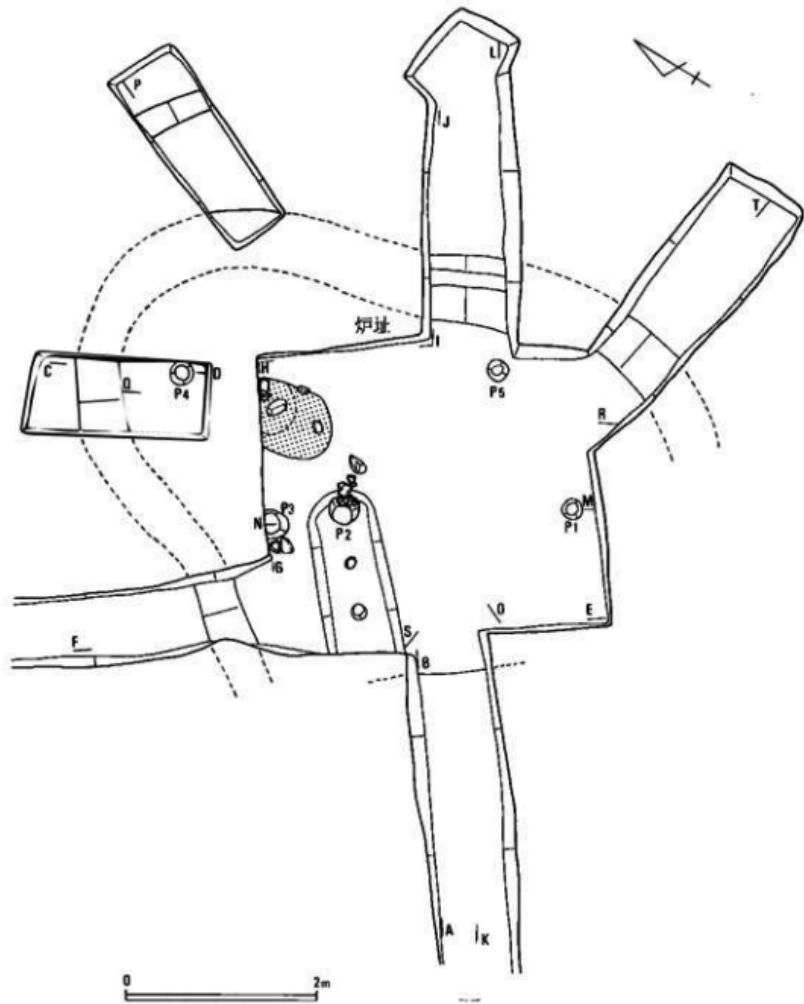
第7図 1号住居址調査風景



第8図 1号住居址北部（南から）



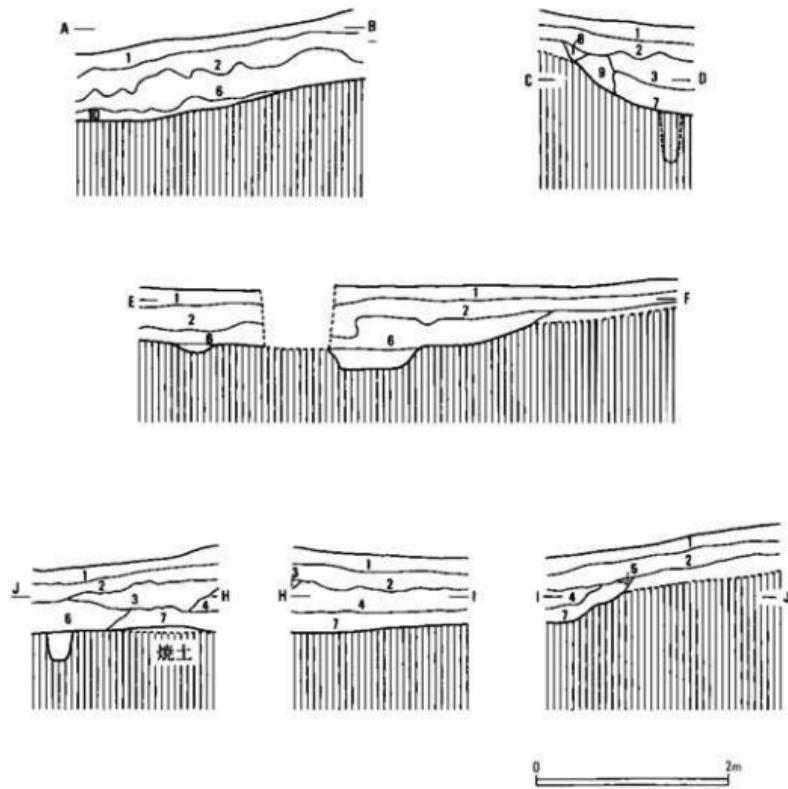
第9図 1号住居址西部（東から）



第10図 清里の森第1遺跡1号住居址平面図
認できた(第13図、K-Lエレベーション図)。

以上6本のトレンチの状況から住居址のプランを推定すると、長径約7m、短径約5mの稍円形状で、北部がひょうたん状にややくびれた形態と思われる。また、南西部には壁がなく、地形の傾斜方向に開口していたものと思われる。炉や土層、柱穴から1軒であると思われる。

土層(第11図) 1層は黒色土層で、上部に腐植がみられ、下部が非常に黒く2層より硬質。下部は、漆黒色土層の一部であろう。2層は、層序の項で説明した黒褐色土層(2)である。上下

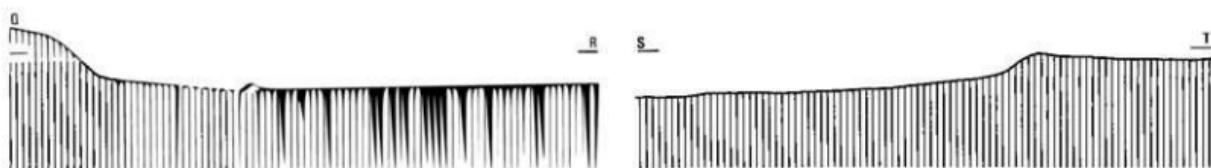
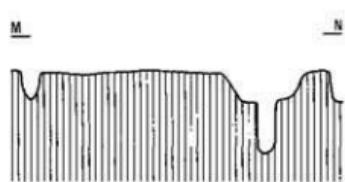
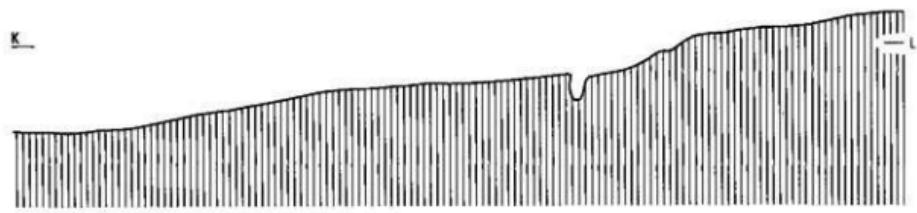


第11図 1号住居址土層断面図

の土層の中で最も軟質である。3層は黒褐色土層(3)で、2層より硬く、木炭片や焼土粒を少量含む。住居址中央にみられるレンズ状の土層である。4層は暗褐色土層(1)で、3層より硬質で、黒色土ブロックや木炭片を多く含む。5層は、黒色土層。6層は暗褐色土層(2)で非常に硬質でローム小ブロックを多量に含む。7層は暗褐色土層(3)で、4層より明るく硬質で、ローム小ブロック、木炭片、焼土粒を多量に含む。8層は黒褐色土層(4)で、3層に近い。



第12図 1号住居址東部（西から）



第13図 1号住居址エレベーション図



9層は黒褐色土層(5)で、ローム小ブロックを多量に含む。10層は暗褐色土層(4)で、ローム小ブロックを多量に含む。第11図E-FとI-Jセクション図の破線により上位の土層は、自然土層の漸移層である。

以上まとめると、3~10層が住居址覆土で、3・5・8・9層のように部分的にみられる黒褐色土層と、広域的にみられる硬質で明るい暗褐色土層に分かれる。前者はより上層にあり、壁の肩の部分にみられるが、前述したように2層が比較的新しい搅乱層であるとすると、自然土層の生き残りである可能性もある。また、住居址南西側の斜面にも住居址覆土がみられ、このあたりも手が加えられていた可能性がある。なお、柱穴内には非常に軟質な暗褐色土層がみられた。

床面の状況 中央トレンチを中心に床面がみられた。炉の周辺が比較的硬かったが、貼り床はなされていなかった。硬質のハードローム層まで掘り込んで床面として利用している。床面は住居址の開口する南西方向にやや傾斜している。

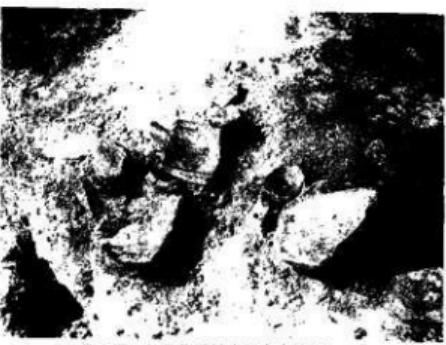
柱穴の状況 柱穴は中央トレンチから4カ所、北西側トレンチから1カ所の計5カ所で確認した。それぞれP1からP5までの番号を付した(第10図)。P1は中央トレンチの南東側中央脇で確認され、直径約20cmの円形で深さ約30cmを計る。P2は中央トレンチ



第14図 1号住居址北西側トレンチ(西から)



第15図 1号住居址炉址および遺物出土状態



第16図 1号住居址土器出土状態

の中央やや南側で確認され、直径約30cmの円形で深さ約55cmを計る。P3は中央トレンチの北西側隅にあり、長径約40cm、短径約30cmの楕円形で深さ約40cmを計る。P4は、北西側トレンチの南東側に位置し、直径約25cmの円形で深さ約50cmを計る。P5は中央トレンチ北東側にあり、

直径約20cmの円形で深さ約30cmを計る。P 2以外は、すべて壁近くに位置すると思われる。炉の状況 中央トレンチの北側隅で確認された。全体は確認できなかったが、推定長径約110cm、短径約70cmの梢円状に焼土の範囲が見られた。地床炉であるが、焼土分布範囲の北側に直径約45cm、深さ5cmほどの若干の窪みが確認できた。窪みを覆う焼土の上部に長さ20cmほどの礫があった。

遺物の出土状況 遺物のはとんどが炉の南側周辺に分布していた。床面直上かやや浮いた状況で出土した。また、若干の礫も同所に分布していた。

出土遺物 (第17~19図) 第19図1は深鉢形土器である。最大口径20.5cm、高さ27cmである。3分の1を欠損しているが、口縁部から底部までの破片が出土している。

器形は、口縁部から底部までくびれのない深鉢で、胴部がややふくらみをもつ。口縁端部は平坦でやや外側に傾斜する。口縁内側は、幅1.5cmほどの帯状にふくらみをもち、段をもつ。

文様は、縄文地文である。口縁端部から幅8cmの縄文地文のみの文様帯がめぐる。口縁直下と文様帯下端とは、鋸歯状ないしは波状のそれ一本の沈線によって区画されている。この沈線文は、縄文を施文した後に描かれている。

その下方には、梢円形の区画文の文様帯がある。区画文は一列に横方向に連続し、一周するらしい。区画文の横および下方は、粘土が盛り上げられ、その上を刻み目状の半截竹管文が付されている。上方は、縄文地文がそのまま残存する。区画文の内側には、沈線が一周し、その内側に縄文がみられる。これは、おそらく充填したものと思われる。中央には、鋸歯状ないしは波状の沈線文が、区画を上下に二分するように、横方向に施文されている。こうした梢円の区画文は、3個が残存する。

一方、区画文の文様帯の中に、それより下位に付された抽象文に連続する文様がある。区画文同様、左側に粘土を盛り上げているが刻み目がみられない。また、この半円形の貼付文の内側に一条の沈線をめぐらし、その内側に縄文を充填し、横方向の鋸歯状ないし波状の沈線文を付している。区画文の施文と近似するが、右側に区画がない。また、上方の沈線は右隣の区画文に連続し、下方の沈線と鋸歯状ないし波状の沈線文は、抽象文に連続している。

区画文同志は、その下方で一条の粘土紐貼付による隆帯によって連結している。隆帯の下端には一条の沈線が付されている。その沈線直下から縄文が施文されている。沈線の下方1cm付近には、鋸歯状ないし波状の沈線文が施文され、区画文の文様帯を縁取りしている。区画文と区画文の間は無文である。

区画文の文様帯の下方には、蛇が体をくねらせ、開口したような形の抽象文が付されている。粘土を盛り上げた隆帯で、周縁を一条の沈線がめぐる。さらにその外側に、縄文施文の後に、鋸歯状ないし波状の沈線文が施文されている。抽象文の蛇の胴部にあたる部分には、縄文が充填されている。また、蛇の口にあたる部分には、一条の沈線が半円形に施文されている。この抽象文は、1個のみが残存している。抽象文の蛇の尾にあたる部分は、欠損しているが、残存部から推定すると、直線的に先細りになっているようである。

区画文の文様帯より下方は、抽象文の他は、全て縄文が付されている。ただし、底部から上

方約5cmの区間は無文で、磨きのみがなされているようである。

内面は、全体にいねいに磨かれているようである。使用に伴うらしい表面の剥落が顕著である。また、口縁部から底部にかけ、部分的に黒色タール状の付着物がみられる。

胎土は、かなりもろくなっている。白色の粒子を多く含む。色調は、赤褐色から黒赤色である。

第19図2～4は、同一個体と思われる。2は、波状の口縁の一部である。口縁内側が厚く盛り上げられ、やや尖りぎみである。口縁端部は、やや丸みをもち、きれいに磨かれている。

文様は、幅広の半截竹管の押引き文、鋸歯状ないしは波状の沈線文とがみられる。

3は、やはり口縁部の破片である。口縁内側が厚く尖りぎみに仕上げられている。

文様は、口縁端部に沿って隆帯が見られる。

波状の口縁であるが、波の頂部にくびれがあり、その部分から蕨手状の隆帯が垂下する。

また、蕨手状の隆帯の下端から、左右の下方へ、粘土紐の貼付文が付されている。これらの隆帯の縁部には、幅広の半截竹管による押引き文が施されている。蕨手状の隆帯の直下には、沈線による三叉文がみられ、他の部分には、鋸歯状ないし波状の沈線文が施されている。

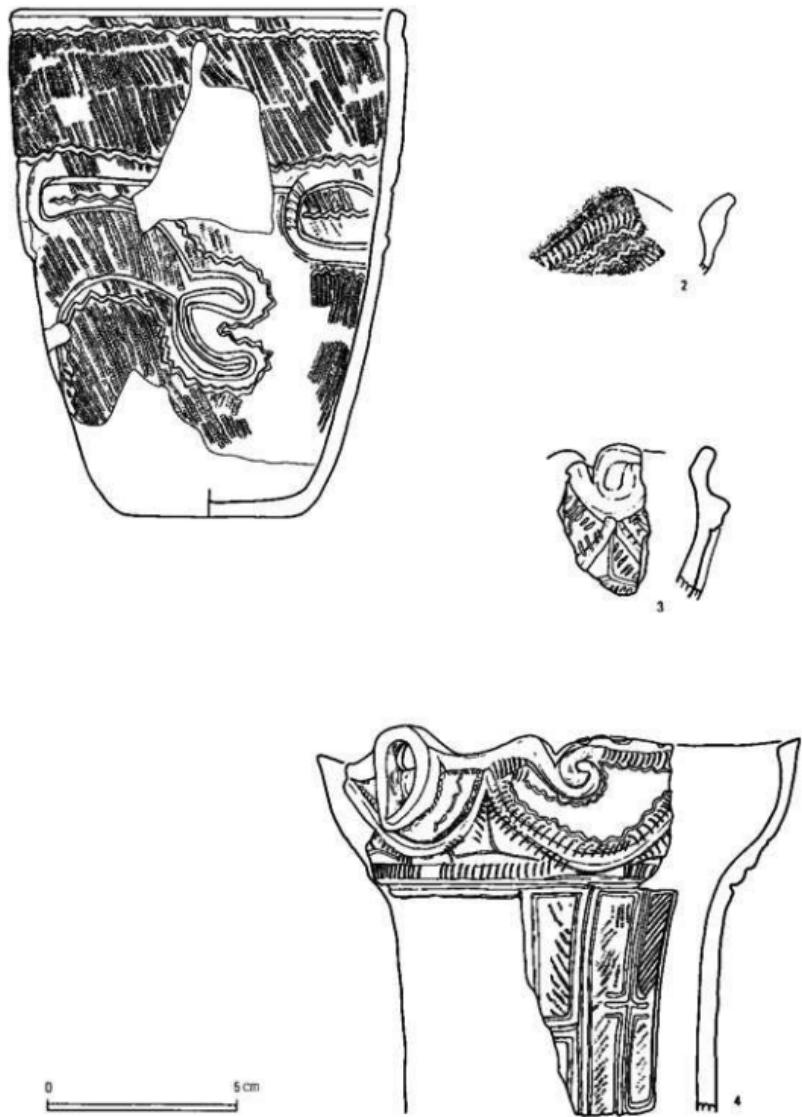
4は、口縁部が広く開口する深鉢である。口縁部内側は厚く、尖りぎみに仕上げられている。外側は、波状の口縁端部に沿って隆帯が付されている。波状の頂部は2カ所残存するが、左側の頂部には、滴状に隆帯がめぐる。滴の口縁側は、内面にむかって直径約1cmの穴が穿たれている。滴の下端は、尖りぎみに仕上げられ、外側に向かって突出している。右側の頂部にはくびれがあり、その直下に蕨手状の隆帯が垂下する。上部の文様を取り囲むように、その下方に弧状の隆帯が付されている。隆帯で囲まれた半円形の区画のうち、左側では、先端三角形の刺突工具による押し引き文が、内側を縁取っている。さらにその内側への字が連続して波状にみえる、細い沈



第17図 1号住居址出土土器(1)



第18図 1号住居址出土土器(2)



第19図 1号住居址出土遺物

縄文がみられる。右側の区画では、幅広の半截竹管による押し引き文が内側を縁取る。さらにその内側を、鋸歯状ないし波状の沈線文が一周する。その内側は無文である。

半円形の区画文の下端には、一条の隆帯があり、頭部を一周し、口縁部の文様帯を縁取っている。その隆帯と半円形の区画文に囲まれた三角形の区画の内側には、幅広の半截竹管による押し引き文が付され、内周を縁取っている。また、区画中央には、沈線による三叉文が付されている。

口縁部文様帯の下方の胴部の文様は、縦に長い長方形の区画文である。2本の沈線によって隆線が作り出され、区画がなされている。図右側の四升の区画は、隆線が一周せずに、区画が完結していない。区画の内側には縄文が充填されているが、区画により右下りの縄文と左下りの縄文がある。また、沈線による斜線文が充填された区画もある。また、各区画の長さも不統一のようである。

底部を欠損している。

胎土に白色粒子を多く含む。色調は、明赤褐色から黒褐色である。

1号住居址の出土遺物は、上記の他に、多くの木炭片と黒曜石チップ1点である。

2. 1号陥し穴(第20~22図)

形態 確認面での平面形は長梢円で、北西方向へやや屈曲している。長軸は南西一北東方向で、2m36cmを計る。短軸は1m10cmである。

掘り込み面である2層下部からの深さは、最大で約90cmである。陥し穴の壁面は、内側に向って傾斜しており、おおむね直線的である。しかし、長軸方向の両端部の壁面は、底面付近で緩やかに湾曲しているらしい。

底面は、長軸1m80cm、短軸50cmである。面として把握できるものの、かなり窪んでいる。壁面と底面との境界も線として把握できるものの、やや不明瞭な部分もある。したがって、陥し穴の横断面は、U字形に近いものになっている。

本地域は、ローム層中に大小の礫を多量に含んでおり、これらの礫に影響されて、陥し穴の整形に支障をきたしたものと思われる。

底面には、3個の小穴が縱列する。小穴は、長径18cm前後、短径12cm前後で、ほぼ30cm間隔で底面の中央に配列している。深さは14cmから16cmである。

土層(第22図) 1・2層が自然層、それ以下が陥し穴の覆土である。

1層は漆黒色土層である。調査地域の東半部に厚く分布している。2層は黒褐色土層(1)である。1層より明るく、硬質である。下部にローム層との漸移層がみられる。

1・2層は、陥し穴上面においても非常に平坦で、厚さも均一である。2層以上の形成段階では、陥し穴は完全に埋没していたものと考えうる。

3層は黒褐色土層(2)である。層序や1号住居址の項で説明した同名の土層とは一致しない。2層より黒く硬い。この土層もかなり水平に堆積しているように見える。

4層は、木の根による搅乱層である。

5層は黒褐色土層(3)である。ローム層小ブロックと思われる、黄褐色土の幅1cmほどのほ

水平な筋が、本土層の中央付近で一本観察できる。土層自体は3層より黒いが、軟質である。

6層は暗褐色土層である。ローム層と黒色土層とが混在するような土層である。ローム層ブロックを多量に含む。

第22図に示した土層断面図は、陥し穴の短軸方向の断面の一部である。樹木の巨大な根が陥し穴の上に張っていたため、全体を見ることができなかった。

以上の土層のありかたから判断すると、陥し穴が掘られたのは、自然土層の黒色土層が形成される初期の段階であったものと思われる。昭和59年度に調査した「丘の公園」地域で、黒色土層下部の黒褐色土層（本地域では黒褐色土層（1））の上部で、縄文時代早期末の土器群が出土した（山梨県教育委員会 1986）。したがって、陥し穴の掘られたのは、縄文時代早期である可能性がある。

なお、本陥し穴内から、遺物はまったく見い出されなかつた。

3. 2号陥し穴（第23・24図）

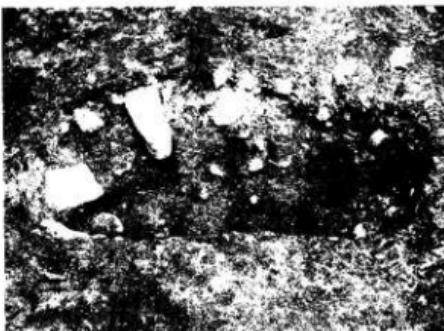
形態 本陥し穴は、1号住居址の床面精査中に発見された。1号住居址に切られており、陥し穴上半部を削り取られている。また、南西部は、樹木のため調査ができなかつた。

確認面での平面形は、直線と半円曲線とによって構成される、非常に整った形態である。長辺は、非常に直線的で平行している。隅の部分は整った半円形で、長辺との境界は明瞭で、角を成す。

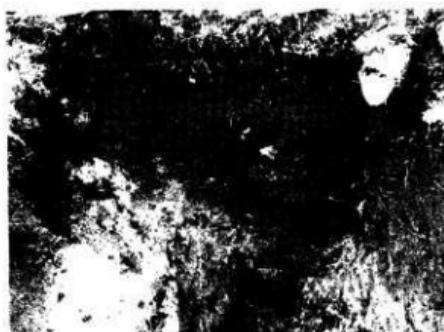
調査された部分の長軸は1m70cmで、底部にみられる小穴の配列がかなり規則的であると仮定すると、推定長は2m50cmほどである。短軸は80cmである。

壁面は、30cmほどが残存している。やや外側に向って傾斜しているものの、かなり急である。長辺部分の壁と隅の半円部分の壁との境界部は、非常に明瞭で筋がみられる。

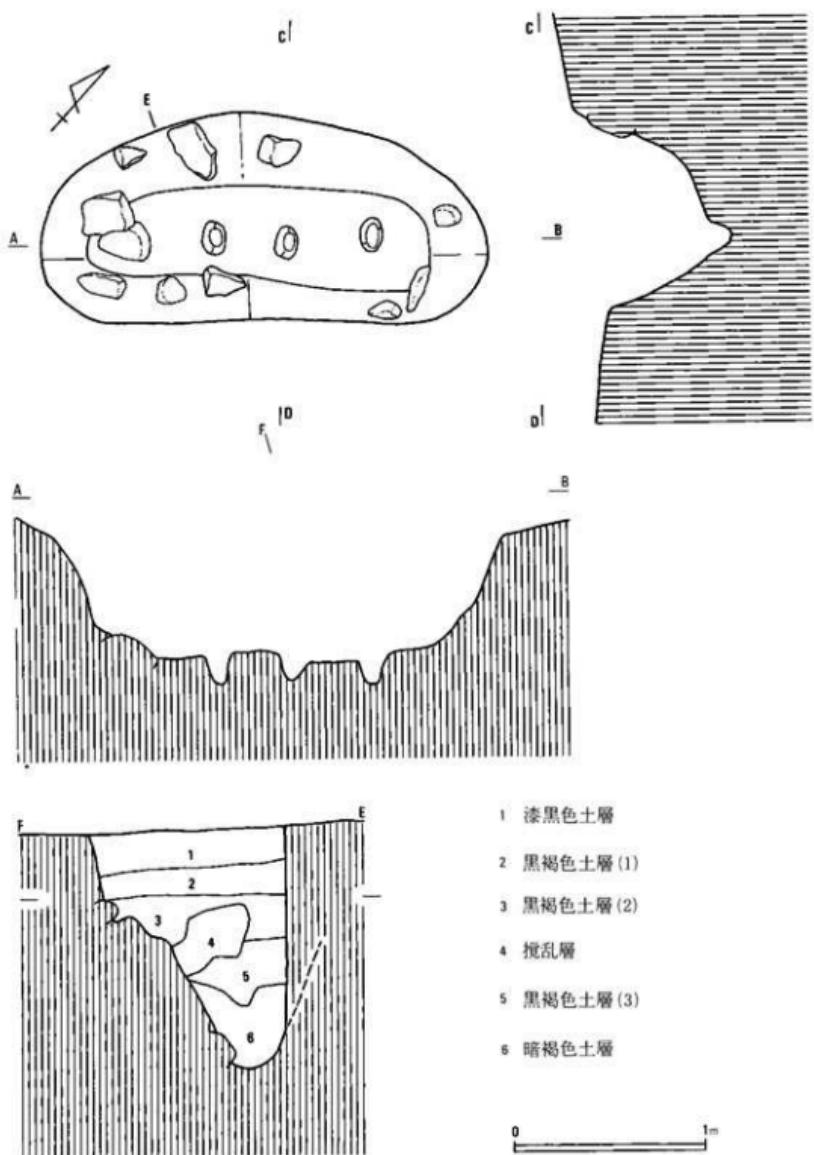
底面は、非常に平坦である。長辺は直線的であるが、隅の部分でやや外側に湾曲する。したがって、隅の半円部との接点が、外側に向って突出するような形になっている。調査された部分の長軸は1m60cm、推定長は、2m30cmである。短軸は60cmである。



第20図 1号陥し穴（南東から）



第21図 1号陥し穴土層断面（北から）



第22図 1号縫し穴実測図

底面には、小穴が2個みられる。図右隅の大型の穴は、1号住居址の柱穴である。おそらく、小穴は3個あるものと思われる。小穴は、底面の中央に、長軸に沿って配列している。北東隅より60cmの所に1個あり、その穴から50cmの所に1個ある。おそらく、小穴は50cm間隔で一列に配列しているものと思われる。直径12cmから14cmの円形である。深さは22cmと28cmである。

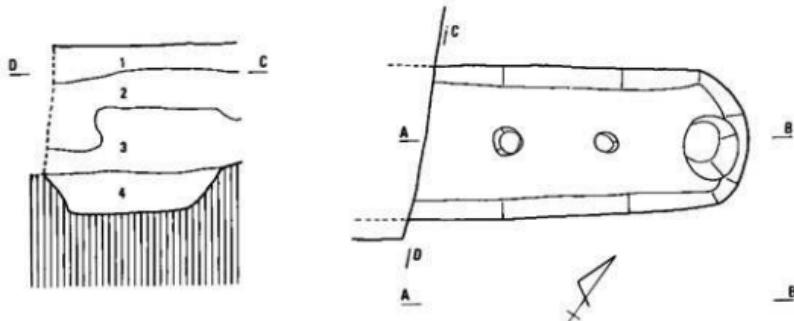
土層 1・2層が自然土層、3層が1号住居址覆土、4層が陥し穴覆土である。

1層は、黒色土層である。上部に腐植がみられ、下部は非常に黒く、2層より硬質で、漆黒色土層の一部と思われる。2層は黒褐色土層で、層序の項で説明した黒褐色土層(2)に一致する。

3層は暗褐色土層で、1号住居址の土層の項で説明した6層、暗褐色土層(2)に一致する。非常に硬質で、ローム小ブロックを多量に含む。4層は、黄褐色ローム質土層である。非常にソフトローム層に似た土層である。陥し穴がハードローム層に掘り込まれているため、その硬さの違いで、辛うじて覆土と確認できた。おそらく、陥し穴の埋没初期に、陥し穴壁が崩落したものと考えられる。



第23図 2号陥し穴（南東から）



- 1 黒色土層
- 2 黒褐色土層
- 3 暗褐色土層
- 4 黄褐色ローム質土層

0 1m

第24図 2号陥し穴実測図

VII 遺跡の範囲

本遺跡から、縄文時代中期中葉の藤内期の住居址1軒と、陥し穴2基が確認された。住居址は、滴状の形をした高地の西斜面に作られている。すぐ直下には、河川の開折による谷底平地と河川があり、これより西側に住居址が分布している可能性はないと考えられる。この住居址が集落の一部を構成しているものと仮定した場合、他の住居址群は、これより東側の高地部分に展開するはずである。しかし、5m間隔で設定した試掘坑には、住居址の片鱗さえ確認されなかった。したがって、この住居址は単独に存在するものであり、集落は存在しないものと考えられる。住居址の形態も、斜面方向に開口する不整円形の特異な形態であるが、高冷地における単独立地という特殊な立地のため、一般集落を構成する住居址とは違った機能をもたされた故の変形であるといった理解も可能であろう。

また、出土遺物が、土器2個体と黒曜石チップ1点という点も着目される。本住居址内で行なわれた活動は、小人数を対照とする調理活動と、石器製作（おそらく石錐製作）であったと思われる。本地域において、内容や量がかなり限定された生業活動が行なわれたものと思われる。おそらく、季節的な狩猟活動ではなかっただろうか。

陥し穴は、1基が縄文時代中期の住居址に切られ、もう1基が土層から縄文時代早期の可能性があるとした。清里地域でこれまで発見された陥し穴は、いずれも同様の形態と土層をもつ。同一時期に形成された可能性も十分ある。今回発見された2基も、主軸方向を同じくしており、同一時期の可能性もある。この高地が、縄文時代早期の狩猟場として、当時の人々に着目されていたことは十分に考えられよう。また、出土遺物のない陥し穴にあって、土層もさることながら、時期の明確な遺構との切り合いをもって発見されたことは、今後、この遺構の時期を考えるのに重要な指標となろう。

今回確認された遺構は、いわば点的な存在であり、遺跡としての認定は、その遺構周辺程度の広がりしかもたないが、当時の生活を考えた場合、これらの遺構が立地する地形全体が当時の人々に着目され、高度に利用されていたとしても決して不思議ではないであろう。

なお、高根町教育委員会による町内分布調査報告書では、清里の森第1～3遺跡はそれぞれ「清里の森遺跡群No3～1」となっているが、本報告書の名称に統一したい。同様に、「丘の公園遺跡群No1～3」は、それぞれ丘の公園第1～3遺跡としたい。

引用・参考文献

- 磯貝正義、飯田文弥 1973 『山梨県の歴史』
山梨県教育委員会、山梨県企業局 1985 『丘の公園14番ホール遺跡』
山梨県教育委員会 1986 『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』
高根町教育委員会 1987 『町内遺跡分布調査報告書』

印刷日 昭和62年3月25日

発行日 昭和62年3月30日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第32集

清里の森第1遺跡範囲確認調査報告書

編 集 山梨県埋蔵文化財センター

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 合資会社 ヨネヤ印刷

